

Henry Smith (ヘンリー スミス)

1940年生まれ。コロンビア大学東アジア学科教授。日本近代史。博士(歴史学)。著書『新人会の研究——日本学生運動の源流』(東京大学出版会、1978)、『広重名所江戸百景』(岩波書店、1986)、『泰山荘——松浦武四郎の一盞敷の世界』(国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館、1994)ほか。

シリーズ 都市・建築・歴史 6  
都市文化の成熟

2006年6月30日 初版

[検印廃止]

編者 鈴木博之・石山修武・伊藤毅・山岸常人

発行所 財団法人 東京大学出版会

代表者 岡本和夫

113-8654 東京都文京区本郷 7-3-1 東大構内

電話 03-3811-8814 Fax 03-3812-6958

<http://www.utp.or.jp/>

振替 00160-6-59964

印刷所 株式会社三秀舎

製本所 矢嶋製本株式会社

© 2006 Hiroyuki Suzuki et al., eds.

ISBN 4-13-065206-0

Printed in Japan

図〈日本複写権センター委託出版物〉  
本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡下さい。

4  
村としての東京

——変転する近代日本の首都像

ヘンリー・スミス

(東辻賢治郎 訳)

「都市というにはまともを欠いている。膨大な緑地は淡々と列をなし、あるいは灰色の継ぎはぎのようになっていて、始まりも終わりもなく、都会というより郊外のように見える。……それは一二五のヴィレージの集合体である。それらはミカドの近臣の城塞の周囲に築えていて、それぞれに公園、別荘、庭園、湖、河川、原野、さらには田園地帯、美しい森林などを有していた。それらが自らを称してトキヨと呼ぶことに決めたのである。」

——イザベラ・バード、一八七八年

「東京の人口の大部分は村民——すなわち小商店主と職人達——が、もともとの村々のすきまを埋めつつ進行した人口の自然増加によって、大きな社会集団へとまとまったものである。」

——チャールズ・ビアード、一九二三年

「世界大戦当時から直後に及ぶ好景気時代……『東京は都会ではない、大きな村だ、或ひは村の集合だ』と云ふ悪罵は、日本人も外人も口にした。」

——谷崎潤一郎、一九三三年

「東京はまったくもって都市ではない、肥大した村だとはよく言われてきたことだ。ある意味では、これは本当である。町の様子はあまりにもみすぼらしく、大きな盛り場さえ、田んぼがそう遠くないところにある気がする。」

——エドワード・サイデンステッカー、一九五七年<sup>(4)</sup>

「日本の都市は、論理と秩序という大方の西洋の規範に逆らいながらも、健全さを保っている。なぜならば、そこに住んでいるのは逆説的にも村人なのである。この意味では東京は少しも都市ではない。それは池袋、渋谷、品川、新宿といった交通要所の周辺に凝集し、そこから放射状に発達したたくさんの村の寄せ集めである。……集まった村はそれぞれ、地元のお店、自前の学校、神社、小銀座、等々を備えている。」

——フランク・ギブニー、一九七五年<sup>(5)</sup>

「大東京も大きな村であると、かつてはよくいわれたが、その意味内容がいろいろあり、誇張にすぎるとはいえ、それは、日本の都市の性格をよく表現している。日本近代の地域社会は、こうした表現がさして違和感なしにうけいられるほど、農村と都市とを通じて、つよい結束をみせた村や町内を構成単位とした。そうして、町内も村同様の性格をもつ共同体的社会として、日本の社会をつくりあげた「ムラ」であったのである。」<sup>(6)</sup>

——福武直、一九八一年<sup>(6)</sup>

「東京の構造は均質ではない。それは美容院、八百屋、喫茶店、パチンコ店、雑貨店、肉屋の主人、豆腐屋のおかみさんなどといった個々の単位から成る小さな町——実際のところは村——の集まりである。さらには、これらの村々は凝集して、この巨大都市の

一角となる街をつくった。これが浅草、上野、銀座、六本木、新宿、その他の多くの東京の地区であり、それぞれ個性的な街となっている。」

——ドナルド・リチー、一九八五年<sup>(7)</sup>

## はじめに

幕末に初めて江戸の市中を訪れるようになった欧米人は、その風景や構造をいかに描写すれば、それまで彼らが見てきたヨーロッパやアジアの都市との隔絶を表しうるだろうかと今日に至るまで呻吟してきた。そして明治以降、訪れる者が増えるにつれ、ひとつの支配的なイメージが少しずつ形づくられてきた。すなわち一群の「村」<sup>(8)</sup>としての東京である。いつしかこのイメージは独り歩きを始め、明治後期には多くの日本人自身もまた「より多く用いられていたのは「ひとつの大きな村」という意味を異にする表現であったが——この表現を用いていた。そしてこのイメージは第二次世界大戦後半世紀を経てもなお、多くの場面で用いられ、意味に深みを加え、複雑さを増し続けている。

なんらかの意味で「村」<sup>(9)</sup>と呼ばれた経験をもつ都市は世界に数多い。一九世紀後半のモスクワは、地方と強い紐帯をもつ多数の産業労働者のために「村」<sup>(10)</sup>と呼ばれた。二〇世紀のロサンゼルスは、その広大なスプロールと郊外の飛び地への分散現象から「巨大な村」<sup>(11)</sup>と称された。また、ロンドン郊外は決まって村のようだと形容されてきた。しかし、ただ東京においてのみ、「村」のイメージは広範な文脈に登場し、長い期間を生き、非常に多様な意味合いを擁しているのである。この表現の歴史を幅広い視点でたどり、いまも続いている東京の本質に関する論争に何がもたらされるかを検討するのが本章のねらいである。

初めに二点考慮せねばならない問題がある。ひとつは、このイメージが英語で「ヴィレッジ」、日本語では

「村」という、二つの言語で使われていたということである。この二重性は、問題を豊かにすると同時に混乱もひきおこした。というのはヨーロッパと日本の政治的・社会的文脈があまりに異なるからである。

日本語の「村」は、幕藩体制ではひとまとまりの単位として税を負担し、ある程度の自治を保証された集落を意味していた。したがって、それは社会的にも政治的にも閉じた一個の単位として機能し、固有の階層的権力構造を具有するものであった。それ故、土地所有制度と地方行政の根本的な変革にもかかわらず、近代を通じて村は強力な社会単位および一貫したひとつの集住の型としてあり続けた。一方イギリスでは、土地は旧来の政治的特権階級に帰属し、その荘園が地方政治権力の地盤として供されていた。「ヴィレッジ」は農民の閉じた集村ではなく、むしろその地方の商業の中心、すなわち日本ではどちらかといえば「町」と呼ばれるものであった。また、英語の「ヴィレッジ」は「牧歌的」な田園地帯のロマンティックなイメージを喚起する。これは、農村地域の風景を、美的観賞の対象よりも生産活動の舞台とした日本には存在しない伝統である。このことが意味するのは、「ヴィレッジ」と「村」のどちらともが、それぞれ目に見える風景と、社会的および政治・経済的組織という、二つのきわめて異なる文脈をもちえたということである。そして結果的に前者が「ヴィレッジ」の、後者が「村」の支配的な用法となっていたのである。

第二の問題は、「ヴィレッジ」も「村」も、文字通りに小規模な地縁的集落を指す場合と、そうした集落にまつわる近代以前の歴史や田園風景といったものへのさまざまな連想を比喩的に示す際の両方に用いられることである。大都市を「村の集合」であるとか「巨大な村」などとよぶのは、当然、ほぼすべての場合において象徴的な言い方であり、好意的にせよ、そうでないにせよ、都市として備えるべき要件を満たしていない都市を示唆する際に用いられた。

また同時に、村と都市はしばしば地理的に近接しており、一方から他方へと成長しつつ、常に人口を行き来さ

せていた。だから「村」という都市イメージは、実際の人口変動や、交通・通信手段の変化とも関連していたのである。近代において、これらの変化があまりに急激であったため、ある一時期の「村としての都市」という言葉の内実は、近代の産業化の中での都市・村双方の変容に伴い、まったく異なる意味内容を引き受けてゆくことになる。とりわけ、首都としての急速な成長に加え、一九二三年（大正一二）年の震災と一九四五（昭和二〇）年の空襲で二度にわたって深刻な破壊を被った東京はそうした動く標的であった。にもかかわらず東京は近世・近代を通じて、世界的大都市のひとつとしての特異性を保ち続けてきた。これはほとんどすべての異邦人の眼差しが証言してきた事実である。

最後に、以下で示されるのは、「ヴィレッジ」あるいは「村」としての東京に言及している資料のごく一部であり、当然、さらに多くが存在するということをおかねばならない。また、こうした例の数多い存在は、この表現が頻繁に用いられていたということを示しており、おそらく会話では文書よりもさらに頻出した言回しであったであろう。こうしたことはすべて、それが長期にわたって非常に幅広く用いられた表現であることを示唆している。本章の末尾には、こうした用例から代表的なものを付記としてあげておいた。

## 第一節 第一印象

横浜開港後の最初の数年間に江戸を訪れた欧米人は、この都市の膨大さとあふれる緑に圧倒された。ジョージ・スミスはこれを「青々とした坂とこんもり茂った森からなる都市」（一八六〇年）と呼び、ルドルフ・リンダウは「都市というより、公園とウィラの広大な集積」（一八六四年）であると述べている。また同時に彼らは、建築物の外観が単調で、特定の時代を示す特徴を欠いているという印象をもった。これは、都市建築が歴史様式に席

巻されていた一九世紀の欧米とはとりわけ対照的であった。たとえばスイス使節エメ・アンペールは一八六四年に次のように書いている。

「日本の首都の巨大さは奇妙な印象を与える。視覚と同様に想像力もまた、人家の隙限のない広がりや漂ううちに疲弊してしまう。立派なものも小さなものも、これらの人家はすべて判で押し出したように均質なのである。われわれの古いヨーロッパの都市はそのどれひとつをとってみても、それぞれに異なる貌をもっている。それはさまざまな時代のモニュメントによつてはつきりと示され、古代から継承された魅力あふれる厳肅さをひとつの壮大な芸術的效果へとまとめあげている。だが江戸は、すべてが同じ時代のものばかりで、すべてが同じ様式なのだ。」<sup>(10)</sup>

一八六七年に江戸を訪れたフランス人マリ・J・レルルは、同様の印象を次のように述べている。

「江戸には、ほかのどこへ行っても見ることができあふれるあのモニュメントがない。あらゆる時代を通じて造られてきた、美德の象徴であったり、偉業の記念物だったりする彫像、偶像、凱旋門、そういったものがない。……ここには、時の流れが人々の考えを変化させ、事物を遺してきたということ、すなわち過去というものの存在の徴がまったくないのだ。」<sup>(11)</sup>

いうまでもないことだが、こうした欧米人は、江戸の歴史が、建物のファサードとは別のところに飾り気なく刻まれていたということを知らなかった。中国と同様、豊かな歴史が蓄えられていたのは、日本で一九世紀に爆発的に数を増した石碑の類や、市中の多くの墓地に置かれた墓碑であったのだ。東アジアにおいては、歴史は建築ではなく、碑文に封じ込められていたのである。

これらの幕末の江戸の描写には、しかしながら、「ヴィレージ」という都市のイメージは見当たらない。これが最初に現れるのは、ヴィクトリア朝時代の傑出した女流旅行家であったイザベラ・バードの旅行記である。日

本への旅は一八七八（明治一一）年のことであった。東京に関する描写はまず、均質性、緑地、無際限な広がり、といったお定まりのものから始まる。

「東京の眺望には、その大きさが与える印象を除けば、驚くべきものはなにもない。実際のところ、それは退屈なまでにみすばらしいのである。丘は高台というほどのものでもない。しばらく視線を預けられるような目立つものもない。都市というにはまとまりを欠いている。膨大な緑地は淡々と列をなし、あるいは灰色の継ぎはぎのようになっていて、始まりも終わりもなく、都会というより郊外のように見える。はるか遠くに目をやれば、これまた単調な灰色の継ぎはぎである。人はあそこもまだまだトキヨですよ、と教えてくれる。もうさらに聞く気にもならない。これは壮大な広がり、を有する都市である……」<sup>(12)</sup>

さらにバードは、この都市が実際に「ヴィレージ」から形づくられた、ということに歴史的根拠があったかのようによつてに述べている。

「それは二二五のヴィレージの集合体である。それらはミカドの近臣の城塞の周囲に築いていて、それぞれに公園、別荘、庭園、湖、河川、原野、さらには田園地帯、美しい森林などを有していた。それらが自らを称してトキヨと呼ぶことに決めたのである。中には日本橋、浅草、神明前の界限のように、非常に密集する地区もあった。」<sup>(13)</sup>

バードが、都市景観の視覚的な印象ではなく、都市の実際の成り立ちを歴史的に述べていることに注目したい。そしてこれがこののち、東京の独特な形状を説明する方便のひとつとなる。「公園、別荘、庭園」を有する「ヴィレージ」というバードの描写は、封建制度下のイギリスの荘園を想起させる。一方でバードが名指した地区は高密度の下町である。これらの説明は歴史的には意味を欠くものであるが、都市の成長プロセスを包括的な有機的結合の過程として理解しようとする意志を読み取ることができる。しかし、ここで重要なのはイギリスの「ヴ

「イレッジ」は日本の農村とはまったく異なる、という事実である。イギリスの「ヴィレッジ」は農民の集落ではなく、たいいていは教会、酒場、商店および各種の職人を擁しており、「村」ではなくむしろ地方の在郷町に相当するものであった。

イザベラ・バードの来訪からちょうど一年後、その旅行記が世に出る一年前に、アメリカ人ジョン・R・ヤングも似たような感想を残している。彼は一八七九（明治一二）年の夏、前任の合衆国大統領ユリシーズ・グラントに伴って来日した。ヤングはグラントの世界旅行の公式記録を記しており、東京については以下のように述べている。

「東京は世界有数の大都市である、といった実感はなかなかわいてはこない。東京はわずかな緑の広々とした土地とばらばらの囲い地を持つている、町村から成り立っているように思える。東京は静かな表情をしていることを除くと、これといって際立つた特徴は何も見られない。」<sup>(14)</sup>

バードは東京は事実として元来村の集まりであったと述べていたが、このヤングの表現が歴史的な言説ではなく喩えであることは注意に値する。東京は村々の連なり「のようである」、という表現で彼は、それぞれの地区同士が緑地によって分断されているということを単に述べようとしたのではなく、建築物が質素で、「世界有数の大都市」に当然期待されるいかなるモニュメンタリティも持ち合わせていないことをいおうとしているように見える。けれども明らかに彼は、「眼を留めるような目立った物」が何もないというバードに通じる見解を述べているのである。

大正初期（一九一〇年代前半）に至るまで三〇年以上にわたり、この「村の集まり」という東京描写は、都市自体が明治後期の急速な産業化によって変貌を遂げている間も絶えることなく繰り返される。いくつか例をあげよう。

「東京は村の集積のように見える。それらは中間領域がなくなるまでお互いに向かって成長してきたのだ。」<sup>(15)</sup>  
（サイモン・スターン「中国および日本旅行覚え書き」一八八六年）

「この都市はもともと村の集まりであり、徐々にひとつの名の下にまとめられてきたのだ。いまだに丘陵、庭園および木立によって分割が保たれているのは幸いである。」<sup>(16)</sup>（ヘンリー・フィンク「日本で逸業をもとめて」一八九五年）

「これが世界で最も大きな都市であるかどうか、私にはわからない。おそらくそうではあるまい。しかしながらロンドンを凌いでいる。これは、われわれが理解している意味での都市というよりは、巨大で、広い範囲に散らばった美しい村、あるいは、蝟集した複数の村である。」<sup>(17)</sup>（フレデリック・バルフォア「著名なる文筆家によって記録された日本」一九〇四年）

「東京は近年次第に集中化してきてはいるが、本来的な都市というよりは城のまわりに寄り集まった村である。」<sup>(18)</sup>（ジョゼフ・ドトルメル「帝国日本」一九〇八年）

「トキオは……大都会としての一貫性を欠いている。いまだに百を超える村の集積を成していて、それらは以前將軍の本拠地の周囲に蝟集し、やがてひとつにまとめられたものである。」<sup>(19)</sup>（A・H・エクスナー「私が見た日本」一九一〇年）

「東京ははじめ都市ではなかった。幾世紀の間、いまそれがある場所は湿地帯で、一三か一四の漁村があり、これらは互いにかなり隔たっていた。これらの村は、ロンドンの前身となった複数の村のように明瞭に分節されてはいるが、いまや外国人の目には峻別できない。」<sup>(20)</sup>（ハミルトン・W・マビー「東京の路上」一九一三年）

これらの証言を細かくみると、多くの具体的な差異が目につく。たとえば、一〇〇の村から形成されたと述べる者もあれば、「一三か一四の漁村」と述べる者もある。だが依然として共有されていたのは、東京の景観がま

とまりを欠いている、という見方であり、そこかしこに緑地の継ぎはぎを残す景観はこの都市の無計画な成り立ちを反映している、という見解である。実際のところ、これは、明治後半ではなく、むしろ明治初期における東京の特徴を正確に捉えたもので、都市自体の容容と無関係に古いイメージが生き続ける様子を示す例にもなっている。

最後に、これらが大体において好意的な、あるいは少なくとも中立的な評価であるということに注意しておく。フィングの一九九五年の記述はさらにこう続いている。

「まさしく、この田舎と都市との混淆にある東京は、われわれ自身の都市が美学と衛生を身につけた将来のありさまを予見させるものである。」<sup>(21)</sup>

## 第二節 「ヴィレッジ」から「村」へ

「ヴィレッジ」としての東京というイメージは、明治末から大正時代にかけて（一九一〇―二〇年代半ば）三つの点で大きな変化を被った。第一の変化は、西洋人だけでなく日本人によっても用いられるようになったことである。彼らは英語「ヴィレッジ」のかわりに日本語の「村」を用いた。第二に、「村々の集積」ではなく「巨大な村」という具合に複数形ではなく単数形で用いられるのが一般的になった。そして第三に、この言回しははっきりと否定的な調子を帯びるようになった。とりわけ鮮烈な証言が谷崎潤一郎の随想「東京をおもふ」の中にある。一九三四（昭和九）年に書かれたこの文章の冒頭で、谷崎は関東大震災以前の東京の状況を回想している。谷崎が一九二一（大正一〇）年に横浜に越した際の感慨である。曰く、「いかに東京最良の人でも、あの時分、世界大戦当時から直後に及ぶ好景気時代の帝都を、立派な「大都会」だと思つたものはないであらう。」<sup>(22)</sup>

これに続くのは、「東京は都会ではない、大きな村だ、或ひは村の集合だ」と云ふ悪罵は、日本人も外人も口にした」という重要な指摘である。さらに続けて、東京のでこぼこでぬかるんだ道路や、都電の混雑、貧弱な電話網などを槍玉にあげながらその意味するところを明らかにする。明らかなのは、東京を「大きな村」にしているのは、その外観やあり余る緑地ではなく、近代的な都市インフラの不備であったということになる。そのイメージが西欧の「ヴィレッジ」から日本の「村」へ、すなわち田舎と都会が有機的に混ざりあつた田園風景の情緒的な評価から、時代に追従できなかった首都への反感のこもつた非難へと遷移するのに伴つて、事態は完全に逆転した。それぞれが対照的なものを期待していたのである。明治期の欧米人が日本の新しき、近代的な要素にあまり関心がなかつた一方、日本人自身はそれを当然のこととして期待するようになっていたのである。

谷崎はこの随筆で、「大きな村」という日本人の東京認識にかんして、近代都市としての不足ではなくその文化の次元に焦点を合わせてさらに厳しい論を展開している。ここに至つて彼の批判は都市・東京ではなく、その住民たち、すなわち「東京人」に向けられる。谷崎がこれを一九三四（昭和九）年に書いたということを忘れてはならない。谷崎は第一次世界大戦後の好況期に東京の真ん中、日本橋に育つが、前述のようにその故郷に幻滅する。当時は彼自身、西洋と「モダン」な物事に夢中になつたが、東京は真に近代的な西洋の都市の後塵を拝しているだけだと感じていた。一九二三（大正一二）年に関東大震災によつて古い下町地区一帯が破壊された後、関西に移つた谷崎は、京都、奈良、大阪を巡つてただちに日本の伝統を再発見し、近代的、西洋的なものを敵とするようになるのである。「東京をおもふ」が書かれたのは芦屋（兵庫県）に居を構えてから一一年後のことであつた。

谷崎は、東京の中心地が震災後に大きく改善されたことは認めている。「丸の内から、銀座、京橋、日本橋に至る界限は、文字通り面目を一新した。……外国から帰つて来た人々は、今の東京の立派さは、をさをさ欧米の

一流の都市に劣らないと云ふ<sup>(23)</sup>。しかし、彼はこの「外観上の変化」はほとんどこの都市の風俗や習慣には影響を与えていないという。そしてとくに東京の食についての長大かつ子細にわたる批判を展開した後、その文化の劣等性の理由を説くに至る。谷崎は基本的にそれを「東北の玄関」という東京の位置づけに帰す。「震災後は純粋の江戸つ児が次第に何処かへ影を潜めて、東北人の入り込む数が増えます殖えて行くらしい」。東北弁を話す人口の増加を嘆き、その地方を「西部日本に比べると財力や文化も劣つてゐるのだ」といい、再び村のイメージを召還する。「震災前の東京市は市でなくて村だと云はれたが、震災後の今も、或る意味に於いて田舎なのだ」。「或る意味に於いて」という文句によって谷崎は、表現の意味がこのとき変化しつつあることを示唆している。もはや東京の近代的都市インフラ整備の遅滞が問題なのではない。事実、震災復興の一〇年間で東京の近代性は著しく向上した。いま、しかし、それが「村」であるのは、より長い歴史をもち、よりしつかりと確立された西洋の諸地域に比して文化レベルが劣っているためなのである。谷崎がここで言及しているのは、東京の具体的なあり様でも、社会の仕組みでもなく、〈都市性〉の文化的な質なのである。これは、都市を学識と風雅と洗練の場として捉えたもので、日本と西洋の両方において古代からの見方である。英語では、このような対照はたとえば「都会的 (urbane)」と「田舎っぽい (country)」の対比で捉えられる。日本語では「雅びた」と「鄙びた」となる。東京を「村」と呼んだときに谷崎の念頭にあったのは農村ではなく、一般的な意味での「地方」である。彼はそれを軽蔑を込めて「田舎」、さらには「田舎くさい」と称する。最も「田舎くさい」とみなされる地域とは米沢(山形県)、会津(福島県)、秋田などの地方都市であると、彼ははっきりと述べている。

この特異な「村」としての東京という考え方は、実際には谷崎個人に独特のものだったかもしれない。しかし、これはとりわけ昭和初期(一九二〇年代後半)にかんしては適切な表現であった。事実この時期に東京への大量の移住が行われ、恒常的に増大する都市人口は一九四〇(昭和一五)年までに日本の人口全体の四〇%に達しよ

うとしていたのだ。農村人口は実質的には変動せず、そのためとくに一九三〇年代(昭和五―一四年)、地方が貧困に喘いでいた時期には、地方人口の自然増加分を事実上都市が吸収していたのである。無論、このことは、大量の農民が農村から直接大都市に流入して来たということを必ずしも意味するものではない。ジェームズ・ホワイトの研究によれば、それは東京への移住というよりは、むしろ地方の町や都市を経由する段階的移住であった<sup>(24)</sup>。この意味で、谷崎が「村」を「地方」一般の意味で捉えたのは非常に適切であった。とにかく、結果的に東京の生え抜きでない人口の比率は高いままにとどまり、谷崎が述べたように「江戸つ児」や「東京人」は依然として絶滅危惧種であったのだ。

その一方で、欧米の報告において村としての東京というイメージが用いられることはずっと稀なものになってきていた。注目すべき例外はチャールズ・ピアードによる叙述である。ピアードは進歩党時代の著名な都市改革家で、ニューヨーク市政調査会 (Municipal Research Institute) の理事長を務め、東京市長・後藤新平に任じられて東京市政の研究を行った。ピアードの報告は一九二三(大正一二)年の大震災の直前に作成され、*The Administration and Politics of Tokyo* として刊行された。報告の中で、ピアードはこの都市について以下のよう興味深い解説を行っている。

「この都市の社会構成のなかで最も際立っている要素は、つましい家財を所有する夥しい数の小商店主や職人らであり、彼らは長時間の労働に堪えながら生存競争の中で日常の些事に忙殺されているのである。実際のところ、東京は、(日本のマンチェスター) 大阪と異なり、中心部に都市的な領域をもった村々の集合体である。東京の人口の大部分は村民——すなわち小商店主や職人達——が、もともとこの村々のすきまを埋めつつ進出した人口の自然増加によって、大きな社会集団へとまとまったものである<sup>(25)</sup>」。

ピアードはここで、それまでの英語における「村」としての東京の用法に対して独特のひねりを加えている。

一方でピアードは、東京は歴史的に散在する村々の中間のスペースを「充填する」ことよって発展してきたという、ピアードが四〇年以上前に示した理解を引き継いでいる。しかし、彼の「村」の概念は空間的なものというよりは、第一に社会的なものであるということに注意すべきである。というのは彼は、「村民」を小商人および職人と明確に定義しており、それらは日本では村でなくむしろ町の古典的な範例であるのだ。このようなはつきりとした表現は、しかしながら、英語で「ヴィレッジ」を用いた過去の著述家たちもまた、農村でなく市の立つ町を想定していたという可能性を確証させるものである。

と同時にピアードが東京を訪れたまさにその時期の、谷崎の証言は次のようなものであった。いわく、「『東京は都会ではない、大きな村だ、或ひは村の集合だ』と云ふ悪罵は、日本人も外人も口にした」。すでにみたように、この文句に込められていたのはこの都市の不十分なインフラの状況への批判であり、これはピアードの記述とはまったく異なる含みをもつものである。谷崎には多くの外国人の知人があったから、「日本人も外人も」用いていたということについては間違いないだろう。つまりは、語の新旧の意味合いが混ざりあい、重なりあっていた時代であったといえるだろう。

### 第三節 「村」社会・日本

敗戦後の占領下にあった一九四五（昭和二〇）年当時、東京は廃墟と化しており、「村々」の都市というイメージはほとんど意味のあるものではなかっただろう。しかし、戦争がもたらしたその荒廃こそが、日本の知識人らに、ファシズムの根源の探求を射程に据えた戦前の社会構造の再検討の契機を与えた。この探索は、ただちに近代日本の都市と農村との関係の新たな精査を促す。この検討作業は、占領末期に始められて高度成長期まで継

続され、「村」としての東京という表現にまったく新しい文脈を与えることとなった。日本の首都に認められる多様な容貌——庭園のような風景、不定形に拡大する形態、あるいは未熟なインフラ、そして農村から流入する移住者たち——に与えられた、不正確で漠然とした名辞は、いまや、ひとつの精密な学術的議論の対象となったのである。

〈都会と田舎〉という問題は、近代日本の政治理念における積年の中心的課題であり、とりわけ、道徳の根源を農村に措定していた明治国家のイデオロギーにとって重要な問題であった。有徳な一方で疲弊した農村と、快楽主義的かつ消費者主権的な都市の対比を念頭においた当時の支配的な考え方は、戦後、農村と大都市の連関がはらむ問題系のひとつとして捉えられるようになったのである。初期の例として明快なものは、一九五四年に「思想」に発表された神島二郎（一九一八—一九八）の「庶民の意識」の分析の試みである。神島は柳田國男の民俗学と丸山眞男の政治思想史に学んだ政治学者である。そこで神島は、近代日本の「ムラビト」の二類型についての独自の用語法を示している。「第一のムラビト」は、自然村の住民であり、神島はこれを五つの秩序原理の器とみていた。すなわち神道主義、長老主義、家族主義、身分主義、自給自足主義である。「第二のムラビト」は、都市、すなわち学校機構や官僚組織によって再生産される「擬似自然村」の住民である。神島は「村としての都市」という考え方を明晰に提示するも、東京についてはとくに頁を割かず、非常に抽象的な議論にとどまっている。どうやら神島は都市生活の実際的な成り立ちには関心を向けなかったらしく、近代都市の地縁社会の単位である「町内」には言及さえしていない。彼の注意はむしろ、いまだに地縁的な村に根ざしている意識のありように集中している。そこへ帰ることのできない「第二のムラビト」は、それを回想するしかないのだ。「ムラ」「ムラビト」という片仮名の使用も、神島が実際の集落形態を考慮に入れていないことの証左として無視できない。彼はそうしたものよりも、むしろ農業中心の「自然村」に根ざす特定の「精神構造」を重視したのである。



神島自身は彼の論を「村としての東京」という古い歴史をもつイメージに結びつけていたわけではなかったが、この接続は若き都市社会学者、奥田道大（一九三二）によってただちになされた。神島の議論が「近代日本の精神構造」の一部として敷衍された形で発表された直後の、一九六一（昭和三六）年に行われた講演においてである。奥田は、「東京人のパースナリティ」という演題の下で江戸っ子と東京人の像を歴史的にたどり、その末尾近くで東京人の将来について語っている。

「それでは、東京人のばあいこの期待はどうなるか。回答がきわめて悲観的にならざるをえないことは、さらくにくだくだしい説明を要しまい。ただ、東京は世界最大の村である」とか（東京人は大いなる田舎人である）とよくいわれるように、力と栄光と繁栄の象徴、東京に向都離村した新しい都会人（第二のムラビト）には、田舎人（第一のムラビト）とは別の身分であるという自覚や生活感情は芽ばえず、その母なる大地（Mother Erde）である郷土との有形無形のつながりがいつまでも保持されている。」

この一節によれば、「村としての東京」という表現は戦後においてもなお「よくいわれるように」なっていたが、そこには新たな力点加わっていったことがわかる。「世界最大の」という限定辞はそれまでにないもので、これは一九六〇年代以降に新たに獲得した「世界最大の都市」というステータスを反映するものである（少なくともギネスブックによれば、このタイトルは今日も保持されている。「東京人は大いなる田舎人である」という言回しも目新しいが、これは一九三四（昭和九）年の谷崎の慨嘆から必然的に導かれるもので、「田舎人」としての東京人、というあまり好意的でない見方が広く普及していたことの証である。谷崎と同様に、神島と奥田の「都市の中の村」への視線はきわめて批判的である。それは彼らが、都市の地方自治の民主的改革が緊急の課題とみていたからである。

社会科学において、戦後の「村としての東京」という表現にとりわけ示唆的な変化をもたらす仕事をなしたもう一人の人物に社会学者の福武直（一九一七—一九八九）がいる。福武は神島と同じく戦中派世代であり、戦前型社会を変革するという熱望を共有していた。しかしながら、出発点と方法はきわめて異なり、彼は農村社会学の方法を用いた実地の農村調査から始めている。福武は、戦後日本の社会学を代表する第一人者で、社会学という学問そのものについても幅広い著述を行った。また、同時に日本の社会にかんする一般的な著作もなしており、この中で彼は村と都市の関係についての考えを展開した。「村としての東京」への言及は、こうした著作の中に散見される。たとえば、『現代日本社会学』（一九七二年）においては、福武は「都市社会の膨張」という一章を都市の問題に割き、まず日本の都市が戦後きわめて急速に成長したこと、その結果として生じた過密と「都市公害」を指摘する。

「首都東京においてさえ、中心地区をのぞいて、今なお汲取バキューム・カーが走らねばならないということは、欧米の都市住民には考えられないことであろう。ゴミ戦争とまでいわれるようになった塵芥の処理もさることながら、尿尿の汲取は、大都市といえども大きな村といわれてもかえす言葉がないことであるといわねばなるまい。」

近代的な都市インフラの貧困を理由として都市を「大きな村」になぞらえるこの言回しはまさしく、われわれがみてきたように、明治後期から大正時代にさかのぼるものである。今日でこそ、人間の尿尿を農業に利用するのはエコロジカルな実践であると認められているが、福武がこれを書いていた時代、汲取りへの依存は、最も頻繁に、かつ決まって指摘される東京の後進性の指標であった。これは英語で書かれた文書においてとくに顕著な傾向であった。

同じ章の後のほうで、しかしながら、福武は都市の中の「村」のさらに異なる意味を掘り下げている。彼によれば、ほとんどの日本の都市では、一階を店舗、二階を居住にあてる形態をとる商店街が主体の消費都市として

発展してきた。そして彼は、「このようないわば下町の商店街では、その社会構造において、むしろ農村に近い性格が残存した」と主張する。この、小商店経営者を都市における「村人」として捉えるという見方は、その五〇年前にチャールズ・ピアードが東京に関する報告の中で提出した見方ときわめて近い。

福武は『日本社会の構造』として刊行された、一九八〇年からその翌年にかけてNHKの大学講座で放送された別の日本社会入門の中で、農村と「町」との類比に焦点を当て、農村と都市の関係について、従来とはさらに異なる考えを展開している。これは「共同体としての村と町」と題された節に述べられている。まず伝統的な農村について子細に論じ、一九四〇（昭和一五）年ごろには日本人の八割がそこで生まれ育っていた農村（いわゆる部落あるいは自然村で、行政村ではない）について、「近代の日本人にとって、村は人間形成の鑄型であった」ということを社会学の共通認識として述べている。ここで彼は神島二郎の「ムラビト」概念と、名著 *City Life in Japan*（一九五八年）を著したイギリスの社会学者ロナルド・ドーアの仕事にとくに言及する。

次に福武は町に目を向けるが、最初に重要な但書きが付されている。曰く、「都市の町は、いうまでもなく、村落共同体と同じような意味で共同体であるとはいいたい」。しかしながら続けて村落と町内とのさまざまな類似点を指摘する。たとえば村寄り合い同様、町内会は個人ではなく、世帯による仕組みで、その機能は多面的であって限定されていない。そして地域行政の下請単位となっていたことなどである。福武は、「自営小商業者の町は、農村のような固定性を欠き、社会的変動も大きかったとはいうものの、都市的であるよりも村的であった」と結論する。この微妙なニュアンスをもつ主張は、日本の近代都市の古い部分に「村」に似た何かが存在する、という社会学的主張として、いまなお大きな説得力を保っている言葉である。福武が続けてこの章の末尾でこれらの議論とくに結びつけるのは、「村としての東京」という言回しである。

「大東京も大きな村であると、かつてはよくいわれたが、その意味内容がいろいろあり、誇張にすぎるとはいえ、それは、日本の都市の性格をよく表現している。日本近代の地域社会は、こうした表現がさして違和感なしにうけいられるほど、農村と都市を通じて、つよい結束をみせた村や町内を構成単位とした。そうして、町内も村同様の性格をもつ共同体社会として、日本の社会をつくりあげた『ムラ』であったのである。」<sup>(29)</sup>

このくだりには、一九七〇（昭和四五）年当時、すなわち高度成長期のただ中でその性格を変えつつある「村としての東京」という表現に感ずるいくつかの洞察が含まれている。第一に彼が明らかにするのは、この表現は明白に東京を指すものであるが、これは東京だけに特有の属性ではない、という点である。「大東京も」という言い方に福武が込めるのは、あらゆる社会が村という「鑄型」によって形づくられる日本の状況にあつては、東京——すなわち日本で最も近代的で進歩的な場所という含意である——さえも村的なのだ、ということである。

第二に、「かつて」という言い方は、その表現がもはや用いられることがなく、あるいは、少なくともいまや実状にはあわないという認識の現れである。そして実際、このころから日本語にみられる例は次第に数を減じている。のちにみるように、英語やフランス語においてはその逆なのであるが。最後に、福武はこの表現の意味の多層性に明らかに意識的で、多くの典型的な用例は「誇張」であるという認識を示している。この一節は歴史的な変容の証言として、また福武自身が単なるレトリックとしてではなく、周到な論述でこの表現を扱うという努力によって際立つものとなっている。

このような、東京を村にもなぞらえる「町」という単位による構成物として社会的に理解することは、日本・西洋を問わず、社会科学の論文における広範な共通理解の土台となった。先にあげたドーアの *City Life in Japan* が邦訳されたのと同様に、右に引用した福武の二つの著作は、ただちに英訳された。この話題に関しては日本と欧米の社会学者たちのおおまかな見解の一致があつたのである。たとえば、ドーアには、研究対象とした台東区の町内、〈下山町〉の人々の生活についての詳述がある。福武と同様に、ドーアはとくに町内会とい

う組織を「閉鎖的な農村にふさわしい制度」<sup>(34)</sup>とし、結びの章においては「現在でもなお、徳川時代の農村にあまねくみられた社会関係の多くの特徴が、都市にも残っているのだ」<sup>(35)</sup>と述べている。これまでわれわれは、「村」としての東京」という言葉のさまざまなを振り返りながら、この句の用法が英語と日本語とは異なっている傾向があったことをみてきたが、唯一、社会学者たちによるこれらの研究において、初めてそれが英語と日本語で同じ意味をもったのである。

強調しておくが、こうした見方は一九六〇—七〇年代に特有の状況を反映したもので、今日ではあまり有効ではない。終戦直後の社会学者たちは、このような「封建的」な社会関係は、いずれ消えゆくと言明しており、彼らが「村」と都会的「町」の対比においた焦点は、そうした遺物がはらむ矛盾をはっきりと強調するものとなった。しかしながら、観点を交えてみれば、江戸においては「村」と「町」の区別は明確かつ自明であったことを思い起こすべきで、こうした本来の違いを重視する社会学者もまた存在したということを忘れてはならない。

ついでにいえば、「都会の村」という観念もまた、アメリカの都市を扱った社会学の文献に現れたもので、とりわけハーバート・ガンズが、ボストンのウエスト・エンド地区のイタリア人街に関して行ったよく知られる研究（一九五七年からその翌年に実地調査、一九六二年に *The Urban Villagers* として出版）で用いた語法であった。ガンズは、それまで長らく都市社会学の研究者に「他民族小集団 (ethnic enclave)」と呼ばれていた、単一の移民共同体のみから構成される都市の近隣集団の類型を指すものとして「都会の村」という語をつくり出した。そのため「都会の村」という言葉はそのような民族小集団を示す標準的な社会学用語となったが、同時に、驚くほどに日本の場合とよく似た論争と誤解を招くことにもなった。東京には比肩しうるような民族小集団はほとんどなかった、ということはいままでもないが、問題は、「村」という語が、一部では社会学的記述のための用

語として用いられたが、同時に、意図的なものであれ無意識的なものであれ、レトリックとしても用いられたことである。たとえば、ガンズはエスニックな地域共同体を「ロマンティックに」描いたとして批判されたが、この嫌疑は「村」の感傷的な含意にのみ由来しうるものである。日本の場合とよく似ているさらに大きな問題は、有意味な研究単位とされていた近隣社会の現実が、まさにこれらの先駆的な研究が行われていた時期にその有効性を失いつつあったことである。日本でもアメリカでも、社会的にまとまりをもつ都市の近隣関係という概念はいまや等しく過去のものであろう。アメリカの〈都会の村〉も日本の〈村〉としての都市も、かつて有した訴求力をもはやもたないのである。

#### 第四節 「村」という夢

その一方、「村」としての東京」というメタファーは、欧米のジャーナリストや訪問者の間では一九七〇年代の初期から復興し、一九八〇年代に隆盛を極める。このまったく新しい傾向は、ある部分、前述した学問的な考察、すなわち日本・欧米双方の研究者による、〈農村〉と〈町内〉の間の希薄ながらも消しがたく残存する紐帯についての研究に影響されたものである。しかしながら、新しいイメージは、その固有の運命をたどることになった。

新たな「村」としての東京」という見方は、戦前のそれと大きく二つの点において異なっている。最も重要な違いは、それが、これらの都会の「村」の現実の性質に関して、以前に増して豊かな理解を示していることである。旧来の用例ではこれは単なる抽象にとどまり、いかなる社会的・空間的内実をも欠いていたのである。このことに関しては、ドーアやそのほかの専門家による英語文献は疑いなく重要な鍵となる。加えて、「村」と

いう語が実際に適切か否かということに疑問が付されるようになり、都市の単位の記述に「タウン」という語が増えていることが見て取れる。<sup>(37)</sup>しかしながら、村と呼ばれようがまちと呼ばれようが、こうした区分地域のそれぞれが明瞭で確固としたものであるという含意は共通していた。そのような単位の要諦をあげてみれば、多くの場合社会学者が「町内」と呼ぶものに相当しているということもはつきりする。これは英語では「近隣(neighborhood)」と呼ぶのが最もふさわしいものだが、この都市的な用語はあまり用いられなかった。このことは、日本の地域社会が、世界のほかの地域と比べてどこか農村的であったということを示唆しているかもしれない。それらの特徴として最もよく引き合いに出されるのが商店街、地元の寺社(およびその年中行事)、そして銭湯である。一般的な記事では、地域の実地的な自治組織、すなわち町内会や商店会にはあまり触れずに、表面的な紹介にとどまるのが常であった。

この「村」としての東京という言回しの新たなブームのもうひとつの特徴は、それがほとんどの場合好意的に用いられたことである。東京をかつて構成していたといわれた昔の「村」は単純に、不分明な、茫漠とした、平屋か二階建ての住居が単調に広がる地帯を指していた。しかし、いまやそれぞれの単位が、活き活きとした生活の溢れる、とても人間的な地域コミュニティとみられるようになった。いろいろな点でこれは、ジェーン・ジエイコプスとその著名な *The death and life of great American cities* (一九六一年) で愛情を込めて活写したような、都市の近隣関係の昔の姿への追想と理解されるかもしれない。実際、イギリスの建築批評家ピーター・ポパムは青山通り裏手の小商店街論(一九八五年)においてジェイコプスをとくに引用している。そこにある店々は「小さな町に見られる種類のもの」であり、「つつましいながらもきちんとしており、便利で少しばかり流行遅れ」、つまり、東京の「村という夢」の主役として現れるのだ。

けれども、いかにこうした記述が肯定的なものであるとはいえ、それらは常に東京についての否定的な見方を前提とするものである。古典的な言い方でいえば、東京は都市ではなく、むしろ村の集積である、という論理である。ところが、東京が明らかに「都市」である、ということを確認することもまた不可能であった。そこで編み出される論理は、それが実際には都市ではあるけれど、「大都市」と弁別されるに足るものではない、というものである。それには三つの大きな欠点があるからである。すなわちアメリカ人ジャーナリスト、フランク・ギブニーが一九七五(昭和五〇)年に示した、もはや古典的な定式のごとく、「東京は絶望的に過密で、汚く、醜い」というものである。このうち過密と不潔という特徴は、多くの日本人都市評論家によってきまって採り上げられ、都市行政と都市計画家が解決すべき大きな「問題」とされた。一方、「醜さ」という審美的な非難は、欧米からの訪問者にとってはるかに重大な関心事として、この都市の第一印象として述べられることが多かった。詩人ジェームズ・カーカップの著書 *Towns* (一九六六年) の冒頭は、こういった思考の構造を典型的に示している。

「第一の印象は、都市というより、なにか巨大で不定形な郊外の工業地帯という感じであり、たいへんに醜悪でうるさい。けれども世界中でもめずらしいほどに魅力的で感じの良い人々がいて、躍動的で熱を帯びている。」<sup>(41)</sup>

「醜さ」に込められた特有の含意は、都市の各部分の「調和」の欠如に帰せられることが常であった。たとえば、ポパムが述べる、羽田から都心への自動車による移動という、一九六〇年代から七〇年代に繰り返された経験である。「最初の印象は、警戒心を抱かせるような調和の不在、完全なる錯乱だった。ひどく不愉快であった」と彼は書く。それは「目のまわるほどの乱雑ぶり……まったく不釣合いの諸要素のごったまぜであった。それらは互いに妥協や服従の気持ちは露ほどもなく、また全体としての有機的結びつきの気配も見せずに、ひしめきあっているのだ」。<sup>(42)</sup>この東京の表面の第一印象の強烈さが、のちに隠れた秩序としての「村」の発見を導くこと

になった。そこでは小さなスケールと人間的な価値が、大きな全体の秩序なき「醜悪さ」からの救済をもたらすのである。

#### 第五節 「村としての東京」を支える論理

「村としての東京」というイメージは、欧米のジャーナリスト的な見方の中で流行のピークに達した一九八〇年代を過ぎると、日本人と外国人とに共有されたよく聞かれる表現としてはほとんど消えてしまったようだ。そのため、ひとつの一貫した歴史をもっていたこの表現を顧みて、一步退いたところからその論理と意義について考えることができよう。ここで述べたい基本的な論点は、東京という都市は——そして拡張していえばあらゆる日本の都市は——まず、一九世紀中葉の欧米の諸都市との比較において何を欠いているかによって説明されたということ、つまり、後者が真の「都市」を構成する要件についての基本的な前提を規定していたということである。それは最も初期の段階、幕末から明治初頭には、まわりを取り巻く市壁の不在によって説明された。市壁は西洋のみならず中国においても、さまざまな意味で都市を規定する最も基礎的な特徴であった。次に、訪問者たちは、時を超えて建ち続ける大規模なモニュメント、さらには特定の時代様式を示す建築物の欠如を指摘した。加えて、石造やレンガ造が見られないこと、その結果火災が頻発することも関心をひいた。すべてのこうした不在が、江戸・東京をなにか都市らしくないものとしていたのである。

あらゆるこうした欠如が順当にあげられていった後でも、この都市を見る者の前には、その計り知れない膨大さ、世界有数の巨大都市という疑いえない事実が残された。こうも広大で、こうも人間の多い場所が都市未満のものでありうるだろうか？ 答えは、これは都市ではなく、複数の村の単なる集合である、というものであった。

「集合」にあてられた単語は、accumulation/agglomeration/aggregate/aggregation/assemblage/cluster/col-lection/conglomeration/extension/group/series など多岐にわたっていたが、どれも同じ文脈で用いられた。これは観察に基づく事実というよりは、それまで見たこともないような、したがっていかなる「都市」の定義にも該当するものではなかった都市の性質をなんとかして説明しようとする試みであった。「村の集積としての東京」という表現を用いていた初期の欧米の訪問者は誰ひとり、村とは一体いかなるものか、ということに顧慮していなかった。せいぜいその都市自体より以前に存在し、江戸へと「統合」されても本質的には変化しなかつたもの、という程度の認識であった。

ここで、欧米人が不足によって「アジア的都市」を評価することは、カール・マルクス、マックス・ヴェーバー以来の西洋近代の都市思想に深く根ざす伝統であることは思い出されてもよいだろう。とりわけ、中世・近世の日本は、堺のような異例があったとはいえ、西洋のような自由都市を築くことに失敗したとみられていた。日本の都市には本来的に欠けているものがあり、それが都市未満のものにしている、といわれたのである。

日本人自身、多くの者が、ヨーロッパの思想や歴史を学び、あるいは実際に欧米の都市を視察するにつれ、東京や日本の都市を不足の問題として捉えることに同調していった。しかしもちろん、日本人にとっては、東京が「村の集合」であるという欧米側が抱いたイメージはあまり意味をなさなかつた。そのような理解が歴史的な事実ではないことは明らかで、日本人は、江戸が周到に都市として計画された都市であり、偶発的な村の集積体にはほど遠いことを知っていたのである（むしろのちのスパロウ化についてはあたっていたかもしれないけれども）。日本人にとっては、幕藩体制においてまったく別のものとして機能し、根本的に異なる社会秩序に属していたムラとマチの違いのさまざまは身近なものであったのだ。伝統的な日本の都市がかつて「村の集積」であった、という主張はほとんど意味をなさない。

日本人の受け止め方は、むしろ、明治期の東京の物理的・社会的現実の急変に由来していた。それは想像上の過去の姿に鑑みるものではなく、近代都市の急速な産業化と成長の過程が眼前にもたらすいろいろなひずみに対するものだった。そして事実として、「村としての都市」という理念の説得的な語り口はこれらのまったく異なる認識にも適用可能なものであった。とはいえ「蝸集した村々」という東京についての西洋のきまり文句は、新たな「一つの大きな村」という日本語のきまり文句に取って代わられた。すでにみたように、このイメージは三つの段階を経験している。近代的インフラを欠いた東京、「田舎」からの移住者に踏み荒らされる東京、そして戦後のムラ的な「町内会」を抱え込んだ東京である。しかし、これらはすべて急変する状況の結果であり、日本都市の変わらざる本性という理念が生み出したものではなかった。西洋の「ヴィレッジ」という概念が揺るぎない伝統的なものであるのに対して、日本人にとってのムラは後進性の象徴であり、遠い過去に置き去りにすべきであったもののシンボルとなった。

一九七〇年代以降の、英語・フランス語での「村としての東京」というイメージの再流行においても、前提はやはり「不在」であり、なかでも秩序だった都市景観の欠如であった。似たような不評は戦前にも聞かれたが、ここに至っては、東京の戦災からの復興がたどった過程のせいでさらに広く聞かれるものとなっていた。〈都市計画〉の不在という認識も、これに関係している。この考えは一九二〇年代から一九七〇年代まで欧米・日本の両方で急速に展開されてきたものである。日本では、日本人と欧米の視察者の両方によって、都市計画はいまひとつの不在のものとして論じられてきた。すなわち、せいぜいのところ、東京では、西新宿の副都心のようなわずかな数の例以外に大規模の都市計画もなく、近代都市計画の理想とする都市機能の緻密な分別などはなかったというのである。その結果として都市全体の「カオス」を前にして、従来の小規模な商店街と「町内」の地縁を東京の真の秩序とみなし、その他をすべて忘れてしまおうとする。得られるのは、ひどく歪められ、限定された

東京の姿でしかないが。

## 第六節 「村としての東京」の別の見方のいろいろ

「村としての東京」という見方の一般的な用法は、もはや底をついたが、それとは別の、さらに興味深い解釈が出てきたことも見逃してはならない。過去にみられたこの見方によるほとんどすべての表現の大きな限界のひとつは、「村」を境界づけられて完結した実体とみなしていたことである。この枠組みは本質的に静的なものであって、二〇世紀を通じて東京が「ネットワーク」都市になってきた点を捉え切れるものではない。人々、物資、そして情報はネットワークを通じて常に流動しているのである。とりわけ鉄道のシステムは世界でも有数の速度と効率を誇るものとなった。人々の移動のネットワークにおいて最も集約的な結集点となっているのは、「駅」という乗換え地点である。

こうしたネットワークの重要性は、ロラン・バルトの一九七〇（昭和四五）年のエッセイ集「表徴の帝国」の中の「駅」と題された刺激的な一篇で指摘された。大勢の欧米からの訪問者と同様、バルトの注意は全体の一貫性を欠いた都市の諸部分に向けられるが、彼が焦点を定めるのは狭い近隣関係ではなく、「カルチエ」と呼ぶもの、すなわち地区である。

「いかにも近代都市らしい広大な地域をもつこの大都会にあっては、各地区の名前は、はっきりしており、よく知られており、大きな閃光のような多少空虚な地図（街路に名前がついていないから）の上にも、きつかりと記されている。この各地区の名前は、……あのきわめて意味ぶかい地名のような因縁をもっている。もしもその地区がきつちりした境界をもち、よくまとまって、おさまりがよく、みごとに一つの領域になっているとす

れば、それはその地区が一つの中心をもっているからである。ただし、その中心は精神的には空虚である。そして通常、その中心とは駅である。<sup>(43)</sup>

このような地区の例として上野、浅草、池袋をあげて、さらにこれら東京の「村々」<sup>(44)</sup>がそれぞれ明瞭な独自性をもっているという定説に触れる。

「これらの地区は、それぞれ異なった種類、別々の肉体、質のかわった親しみ深さを生み出している。……地区の名前の響きが伝えるのは、このことである。地区の名前をきけば、未開人たちと同じように、個性的な民衆のすむ村の姿がうかびあがってくる。際限もなくひろがるこの都会は、ジャングルなのである。」<sup>(45)</sup>

一九七〇年代初め、筆者は、ニューヨーク近代美術館で開催された新宿に関する展覧会で、日本の建築批評家多木浩二、アメリカの建築家ピーター・グラックと関わる機会を得た。われわれは新宿やその他の似たような巨大な駅複合体を、東京の都市性を最も特徴的に示すものと考えた。それらはショッピングとエンターテインメントの計画されざる集中化をもたらした。そこには、高密度な、人間的スケールの活動にみちた界限が現出する。同種の現象は、ほとんどあらゆる東京郊外の駅前の、小規模な駅前商店街でも見ることができよう。膨大な数の人々が通過するこれらの結集点は、さまざまな論者によって東京の「村」<sup>(46)</sup>とみなされていた閑静で落ち着いた町内の補完的存在として重要なものである。共通点は、近所の付き合い同様に、これら大きな盛り場は人と人の交流に不可欠な場を提供することである。イギリスの都市地理学者ポール・ウェイリーが「思うに日本の都市、とくに東京は、ある種の合流点である。その中ではたとえば渋谷のような多くの小さな合流点があり、さらになお小さな合流点がある。こうしてみれば、東京は人々が出会うために集まって来ることのできる場所として理解することが容易になる」と述べる際に捉えているのは、このことに他ならない。

また、村<sup>(47)</sup>としての東京のまったく異なる次元が、この都市を長年愛してきたエドワード・サイデンステッカ

ーの一九五七（昭和三二）年の記述から見えてくる。

「東京はまったくもって都市ではない、肥大した村<sup>(48)</sup>だとはよく言われてきたことだ。ある意味では、これは本当である。町の様子はあまりにもみすぼらしく、大きな盛り場でさえ、田んぼがそう遠くないところにある気がする。……「東京の」大きな祭りは農村のリズムに一致する。」<sup>(49)</sup>

すなわち、ヨーロッパ都市の歳事がキリスト教の祝祭から派生したものが多いのに対し、日本の都市で行われる祭りは、いまなお主として四季に従ったものであり、農村に由来する慣習に倣うものである。同じような主旨は建築家榎文彦の文章にも見られる。榎は、日本の都市が「ごく最近まで、——そして恐らく今なお——巨大な村落であるという現象面だけでなく、本質的に田舎を内部に蔵していた」と書く。<sup>(50)</sup>

これらの指摘は、閉じられた「村」の自足性に代わって、日本の都市が、農耕のリズムを共有し、周囲の自然環境へ帰属していることを強調する。これは、ある意味で、冒頭にみた最初期の欧米人による江戸の理解にわれわれを立ち戻らせる考え方である。彼らは江戸について「青々とした坂とこんもり茂った森からなる都市」であり、「都市というより、公園とヴィラの広大な集積」<sup>(51)</sup>に見えると述べていた。これは川添登が「東京の原風景——都市と田園の交流」<sup>(52)</sup>（一九七九年）で見事に描いた姿である。

このような理解で最も注目に値することは、しかしながら、それがとりわけ英語の country という概念にきわめて近い、都市の対照物としての農村的な風景を喚起するということである。そうした風景は都市に移入される限りでは、単なる大きな「公園 (Park)」という形式をとる。これは江戸の記述で頻出するものである。「あたりの景色全体は、ハイパークやケンジントン公園がつづいているようなものである」と書いた者もいる。しかしながら実際のところは、日本には食用や皮革のために家畜を養った伝統はなく、したがって伝統的な牧草地帯という文化的記憶はもたなかった。また支配階級である武士は完全に都市住民であったため、日本にはその

種の理想を抱く特権的な地主階級もなかった。日本では、都市の上層階級が自然を愛でる際には、むしろ庭という形式をとり、それは田園ではなく山と河、すなわち「山水」という伝統的風景観に拠り所を求めるものであった。<sup>(59)</sup>

江戸が東京へと移行し、訪問者たちが江戸で目にした「公園」的な景観は、西洋式の近代的「公園」ではなく、一方では鎮守の杜や寺院の庭園、他方ではごく小さな庭園的空間の醸成という形をとるようになった。後者は東京や日本の都市において最も目を見張らせるもので、鉢植えや生け垣、街路に飛び出す木々、といったものである。東京は、たしかに川添や幕末の江戸視察者が描いたような緑地の確かな感觸の多くを失ったが、それでも、いろいろな方策によつて西洋よりもはるかに多くの緑を残した都市であり続けている。その違いは、東京では、都市自体の「村々ヴィレッジの集塊」という構造を反映するかのようになり、緑が細分化されていることにある。

東京と田舎に通底する性質として、最後に、楨によつて見出された土地そのものへの執着をあげておこう。

「土地信仰はやがて人々の深層意識として定着し、近代という全く異なつた社会経済機構の中でその執心だけは……連綿と生き続けているのである。……日本ほど、その歴史において、土地に執着し、一方において建築の永遠性を信じないところをしない。空間はどうか、土地において代表され、建造物によつて表象されないうのだ。」<sup>(61)</sup>

主要作物が水稲であるこの国では、幾世紀かを経るうちに、土地は単なる一区画の領域という価値を超える意味をもつようになった。土地に生産力をもたせるためには莫大な労働力の投入が要求される。土地への愛着は、明治以降の人口増加に伴う土地不足の中でさらに強烈なものとなつた。密度においても絶対数においても、日本は一八世紀までは世界で最も人口の多い国のひとつであつたし、もはや稲作農業から遠く離れた都市民の間でも、なお土地への執着が永続することを促した単純な事実は今日に至るまで交わることはない。

土地への執着は、個々の土地所有者に、欧米に比べてかなり大きな力を認めてきた法制度にも反映されている。地権者がいかなるものであれ自分の土地にとどまっていたがるといふ事実、そして東京における土地所有が相続税という特殊な制度によつて恒常的に細分化されてきたという事実は、土地所有の個別化（私的な個人によるもの、企業によるもの）の程度に結果として現れている。このことは、欧米人と多くの日本人自身の双方から非難されてきた視覚的な「混沌」と「醜さ」の解明に多くのものをもたらす。良きにせよ悪きにせよ、土地への執着は東京の最も「村」的な側面であり、そして、今日の世界の諸都市の中で東京をこれほどまでに特異なものとして要因であるだろう。

#### 【付記】

「村としての東京」に言及した著作からの一部抜粋（刊行順）を以下に示す。なお、このリストは、日本語よりも英語での表現に関して網羅的なものである。主として、東京に言及のある、英語圏で書かれた多くの日本旅行記から抽出している。

1879 : John R. Young, *Around the World with General Grant*, Subscription Book Department, American News, p. 597.

1880 : Isabella Bird, *Unbeaten Tracks in Japan*, vol. 1, John Murray, pp. 172-173.

1888 : Simon Stern, *Settings of Travel in China and Japan*, Porter & Coates, p. 58.

1894 : Albert Leffingwell, *Rambles through Japan without a guide*, Baker & Taylor, p. 12.

1895 : Henry Finck, *Lotus-Time in Japan*, C. Scribner's Sons, p. 81.

1895 : Robert Barrett, *In the Land of the Sunrise*, Baptist Book Concern, p. 133.

1904 : Frederic Balfour, "Tokio", in *Escher Singleton, Japan as Seen and Described by Famous Writers*, Dodd, Mead, p. 77.

1910 : Joseph d'Autremier, *The Japanese Empire and its economic conditions*, C. Scribner's Sons, p. 104.



1912 : A. H. Exner, *Japan as I Saw It*, Jarrold, p. 213.  
1913 : Hamilton W. Mabie, "In the Streets of Tokyo", *Outlook*, vol. 125, Sept. 27, p. 171.

1923 : Charles A. Beard, *The Administration and Politics of Tokyo: A Survey and Opinions*, Macmillan, p. 146.  
1924 : Trowbridge Hall, *Japan in Silhouette*, Macmillan, pp. 30-31.

1932 : Peter Quennell, *A Superficial Journey through Tokyo and Peking*, Faber and Faber, p. 59.

1934 : 谷崎潤一郎「東京を歩む」『中央公論』一九三三年一月一四頁、『谷崎潤一郎全集』二二二、中央公論社、一九五九年所収、一四五・一七五頁。

1935 : Frank Hedges, *In Far Japan*, Hokuseido, p. 264.

1957 : Edward Seidensticker, "The World's Cities: Tokyo", *Encounter*, Nov., p. 32.

1963 : James M. Richards, *An Architectural Journey in Japan*, Architectural Press, p. 16.

1965 : Erhard Hursch, *Tokyo*, C. E. Tuttle, p. 1.

1966 : James Kirkup, *Tokyo*, Phoenix House, p. 8.

1967 : David Riesman, *Conversations in Japan*, Basic Books, p. 6.

1970 : 榎文彦ほか「見えがくれする都市——江戸から東京へ」鹿島出版会、一九八〇年、四七・八九・九二・二二五頁。

1970 : Roland Barthes, "The Station", in *L'Empire des Signes*, Flammarion. ロマン・バルト『表徴の帝国』宗左近訳、新潮社、一九七四年、五一・五三頁。

1972 : 福武直「現代日本社会論」東京大学出版会、一九七二年、九二・一〇二頁。

1975 : Frank Gibney, *Japan: The Fragile Superpower*, Norton, p. 74.

1976 : Maraini Fosco, *Tokyo*, Time-Life Bucher, p. 8.

1979 : Peter Neill, "Tokyo : The World's Ultracity", *Asia*, Mar./Apr., p. 20.

1981 : 福武直「日本社会の構造」東京大学出版会、一九八一年、三七―三八頁。

1984 : Haberman Clyde, "The Hidden Soul of Tokyo", *New York Times*, Nov. 4, 1984.

1984 : Donald Keene, "A Livable Metropolis", *New York Times*, Nov. 4, 1984.

1984 : Robert Guillain, "Villages dans la Ville", in Philippe Pons ed., *Des Villes Nommées Tokyo*. Special issue of *Autrement*, September, pp. 61-66.

1985 : Donald Richie, "The City of Villages", *Connoisseur*, Apr. 1985, p. 105.

1985 : Peter Popham, "The Village Dream", in *Tokyo: The City at the End of the World*, Kodansha International, p. 41.

1988 : Daniel Masler, "Deciphering Tokyo", *Japan Journal*, February, p. 68.

1988 : Philippe Pons, *D'Édo à Tokyo : Mémoires et modernités*, Gallimard, pp. 114, 141.

1998 : Roman Cybriwsky, *Tokyo : The Shogun's City at the Twenty-First Century*, John Wiley, p. 7.

1998 : Stephen Mansfield, "Tokyo, the Organic Labyrinth", *Japan Quarterly*, 45: 3, July-Sept., p. 31.

(1) Isabella Bird, *Unbeaten Tracks in Japan*, vol. 1, John Murray, 1980, pp. 172-3. (邦訳『ブード日本紀行』楠家重敏他訳、雄松堂出版、二〇〇二年がまが、本書は新たに訳出している。)

(2) Charles A. Beard, *The Administration and Politics of Tokyo: A Survey and Opinions*, Macmillan, p. 146. (邦訳『東京市政論』東京市政調査会訳、同、一九三三年があるが、本章では新たに訳出している。)

(3) 谷崎潤一郎「東京を歩む」『中央公論』一九三三年四月号(谷崎潤一郎全集)二二二、中央公論社、一九五九年、一四五頁所収)。

(4) Edward Seidensticker, "The World's Cities: Tokyo", *Encounter*, November 1957, p. 32.

(5) Frank Gibney, *Japan: the fragile superpower*, Norton, 1975. (「人は城、人は石垣」大前正臣訳、サンマル出版会、一九七五年。)

(6) 福武直「日本社会の構造」東京大学出版会、一九八一年、三七―三八頁。

(7) Donald Richie, "The City of Villages", *Connoisseur*, April 1985, p. 105.

- (8) John Weaver, *Los Angeles: The Enormous Village, 1781-1981*, Capra Press, 1980.
- (9) George Smith, *Ten Weeks in Japan*, Longman Green, 1861, p. 278 (『テニク日本十週記』高永孝訳、雄松屋出版、二〇〇三頁、三四三頁); Rudolph Lindau, "Notes on the City of Yedo," *Journal of the North-China Branch of the Royal Asiatic Society*, new ser. 1, December 1864, p. 129.
- (10) Aime Humbert, "Swiss envoy from 1862," quoted in English translation in Bayard Taylor, ed., *Japan in Our Day*, Scribners, 1903, p. 102.
- (11) Marie J. Layle, "Le Japon en 1867," *La Revue Maritime et Coloniale*, 1868, p. 33.
- (12) Bird, *op. cit.*
- (13) *Ibid.*
- (14) John R. Young, *Around the World with General Grant*, Subscription Book Department, American News, 1879, p. 597. (『ヘントラ將軍日本訪問記』高永孝訳、雄松屋書店、一九八三年、一六五頁。)
- (15) Simon Stern, *Sojourns of Travel in China and Japan*, Porter & Coates, 1888, p. 58.
- (16) Henry Finck, *Lotos-Time in Japan*, C. Scribner's Sons, 1895, p. 81.
- (17) Frederic Balfour, "Tokio," in Esther Singleton, ed., *Japan: as Seen and Described by Famous Writers*, Dodd, Mead, 1904, p. 77.
- (18) Joseph D'Autremer, *The Japanese Empire and its economic conditions*, C. Scribner's Sons, 1910, p. 104.
- (19) A. H. Exner, *Japan as I Saw It*, Jarrold, 1912, p. 213.
- (20) Hamilton W. Mabie, "In the Streets of Tokyo," *Outlook*, vol. 125, September 27, 1913, pp. 171-172.
- (21) Finck, *op. cit.*
- (22) 谷崎、前掲『谷崎潤一郎全集』二二、一七五頁。
- (23) 同前書、一五八—一五九頁。
- (24) James White, *Migration in Metropolitan Japan: Social Change and Political Behavior*, Institute of East Asian

- Studies, University of California, 1982.
- (25) Beard, *op. cit.*
- (26) 神島二郎『近代日本の精神構造』岩波書店、一九六一年。
- (27) 磯村英一編『東京』有斐閣、一九六一年、一四八頁。
- (28) 福武直「都市社会の膨張」『現代日本社会論』東京大学出版会、一九七二年、九二頁。
- (29) 福武、前掲『日本社会の構造』。
- (30) Ronald Dore, *City Life in Japan*, Routledge & K. Paul, 1958. (『都市の日本人』青井和夫・塚本哲人訳、岩波書店、一九六二年。)
- (31) 福武、前掲『日本社会の構造』三二頁。
- (32) 同前書、三八頁。
- (33) 福武の英語は *Japanese society today*, University of Tokyo Press, 1974 年、45 The Japanese social structure: its revolution in the modern century, tr. and foreword by Ronald P. Dore, University of Tokyo Press, 1982. 2. 1-10 の邦訳は前掲『都市の日本人』を参照。
- (34) フーア、同前書、二八六頁。
- (35) 同前書、三七八頁。
- (36) Herbert J. Gans, *The Urban Villagers*, Free Press of Glencoe, 1962.
- (37) 東京を称した「タウン」による表現の例として、「村と町をいたませたまもの」(James Kirkup, *These horned islands*, 1960 — 「アムステルダム」の田舎 — 「角社」の町々)の日記] 速野浩・徳永鶴三訳、南雲堂、一九六四年)、「小さな町が膨張した町たもの」(George Miles, *The land of the rising Yen*, 1970, p. 187 — 「田舎の町ニマブ」倉谷直臣訳、南雲堂、一九七二年)、「都市町」村の森大成](Maraini Fosco, *Tokyo*, Time-Life Books, 1976, p. 8)、「この町の町中」(Donald Keene, "A Livable Metropolis," *New York Times*, November 4, 1964)、「小さな町」(Richie, *op. cit.*) などがある。

- (38) Jane Jacobs, *The death and life of great American cities*, Vintage Books, 1961. (『アメリカ大都市の死と生』黒川紀章訳、鹿島研究所出版会、一九六九年。)
- (39) Peter Popham, "The Village Dream," in *Tokyo: the city at the end of the world*, Kodansha International, 1985, pp. 42-44. (『村の夢』「東京の肖像」高橋和久訳、朝日新聞社、一九九一年、五六頁。)
- (40) Gibney, *op. cit.*
- (41) James Kirkup, *Tokyo*, Phoenix House, 1966.
- (42) Popham, *op. cit.* (本誌「前掲書」五二頁。)
- (43) Roland Barthes, "The Station," in *L'Empire des Signes*, Flammarion, 1970. (『駅』「表徴の帝国」宗左近訳、新潮社、一九七四年、五一頁。)
- (44) 同前書、五三頁。
- (45) ヒーター・ツラツシ+ヘンリー・スミス「SHINJUKU」[FA+U]、一九七三年八月号、一三三—一五六頁および多木浩二構成・文「特集」都市の経験」『新建築』一九七六年三月号、二一九—二五〇頁。
- (46) Paul Waley, "Learning from Tokyo," in *Rotund Bognar*, ed., *World Cities: Tokyo*, Academy Group, 1997, p. 17.
- (47) Seidensticker, *op. cit.*
- (48) 横文彦ほか「見えがくれする都市——江戸から東京へ」鹿島出版会、一九八〇年。
- (49) 川添登「東京の原風景——都市と田圃の交流」日本放送出版協会、一九七九年。
- (50) Henry Smith, "Tokyo and London: Comparative Conceptions of the City," in Albert Craig, ed., *Japan: A Comparative View*, Princeton University Press, 1979, pp. 45-49; "Kyo ni inaka ari versus Rus in urbe: City and Country in Japan and England," *Senni Ethnological Studies*, 19, 1986, 29-39.
- (51) 横ほか「前掲書」二二五—二二六頁。

【訳者付記】

第一節中の人名について、部分的ではあるが補足しておく。

ジョージ・スミス(一八一五—一七一七)はイギリス国教会の香港・ヴィクトリア教区の主教であり、一八六〇年、本国への一時期帰国の途上に約二か月日本に滞在。邦訳に『スミス日本における十週間』(註9参照)がある。東京の景観をハイドパーク等にぞらえた表現(第六節)はスミスの同書から。

ルドルフ・リンダウ(一八三〇—一九一〇)はロシア生まれの外交官・文筆家であり、日本への初のスイス公式使節の団長として一八五九年に来日。邦訳に『スイス領事の見た幕末日本』(森本英夫訳、新人物往来社、一九八六年)がある。

エメ・アンペール(一八一九—一九〇〇)はスイス時計組合会長、国会議員を歴任し、一八六三年、日瑞修好条約締結のため来日。邦訳に『絵で見る幕末日本』(茂森唯士訳、講談社、二〇〇三年)など。

マリ・J・F・レルル(一七九一—一八八一)は、フランス海軍植民省による『海軍植民誌 (*Revue maritime et coloniale*)』の一八六八年五月および六月号に、海軍中佐として「一八六七年の日本」と題する報告を掲載している(本文中の引用部分はこちら)。一八六七年に第二次フランス軍事顧問団の一員として来日したと思われる。

サイモン・スターン(一八三八—一九〇四)はアメリカの作家・編集者・批評家。一八八七年に極東を旅行。

ヘンリー・フィンク(一八五四—一九二六)はアメリカの音楽評論家。心理学や旅行に関する著書も多数。

ハミルトン・W・マビー(一八四六—一九一六)はアメリカのエッセイスト・編集者・批評家。雑誌 *The Outlook* の共同編集者。

第六節、エドワード・サイデンステッカー(一九二一—)は源氏物語や川端康成の英訳で著名な日本文学研究者で、日本関係の著作が多数。

本文中の引用は、既訳のものはそれを参考にしつつ適宜表現を変更した。またバード「バード日本紀行」、ピアード「東京市政論」は新たに訳出した。